

刊行によせて

2010 年度の年報をここに刊行する。

今年度は、共同研究の最終報告として 1 本、中間報告として 4 本、研究会の報告として附属研究所の公開セミナーに関するものが 1 本、月例の研究会に当たるフォーラムに関するものが 3 本、最終講義をまとめたものが 1 本、あわせて 10 本の論文やエッセイが寄せられた。中間報告として出された 4 論文は、さらに研究の深化が図られ、やがて最終報告としてまとめられるはずである。

公開セミナーは、現所長が企画したもので、その成果はすでに『「知」の十字路—明治学院大学国際学部附属研究所公開セミナー3』（河出書房新社、2011 年）として刊行されている。この公開セミナーは、公開講座と一本化した形で 2011 年度も引き続き行われており、2012 年に河出書房新社から単行本にすることも決まっている。年報の中身は、部分的とはいえ、単行本化することによって広く公開されるようになっている。

フォーラムは、主に前年度サバティカルだった教員や、新任の教員の研究を披露する場として活用されている。教員が研究の成果を社会に向けて発信してゆくことは、言うまでもなく大切な義務の一つである。この年報が、そうした義務にこたえる役割を果たすとともに、明治学院大学大学院国際学研究科の大学院生や国際学部の学生の知的関心にも十分こたえられる媒体になっていれば幸いである。

しかし現状は、会議は増え、研究時間は切り詰められ、教員が研究成果を論文や単行本としてまとめるのがますます難しくなっている。この危機的な事態がどれほど国際学部内で共通の認識になっているかはわからない。忘れてはならないのは、私たちの研究は、決して大学の内部で完結しているわけではなく、常に社会から見られていることである。増え続ける会議に対する出席ばかりが義務付けられ、研究に対する十分な配慮が払われなくなれば、それは個々の教員の研究の可能性を大学自体が潰すことを意味するのみならず、大学の社会的信用を失うことをも意味するのである。

2011 年 12 月

国際学部附属研究所
所長 原 武史